

2008年我が社の環境ビ



—分析機関のCSR(企業の社会的責任)への取り組みの重要性を強調しているが。

「分析機関も、CSRを果たすバランス感覚を持っていない。評価されない時代になっていく。精度管理や測定データの信頼性はもうろんだが、事業活動を進める上で、事業に利益を出したり、CSRに取組むことも大切な。

仕事の上で必要な資格なり、ISO9000やISO14000といった認証取得だけで満足してはいけない。例えばISO9000認証を取得しているだけでは、品質管理は必ずしも万全ではないし、ISO14000にしても同様だ。

「国内には数多くの分析機関が存在し、過当競争から価格競争も一部で生じており、測定データの信頼性に問題が生じるなど、『安かろう、悪かろう』の傾向が強くなっている。情報収集力も必要だ。

また、評価に客観性があってはいけない。客観性へ公平性を担保する必要がある。更に、我々の業界の現場における状況をよく知る必要がある。

「国内には数多くの分析機関が存在し、過当競争から価格競争も一部で生じており、測定データの信頼性に問題が生じるなど、『安かろう、悪かろう』の傾向が強くなっている。情報収集力も必要だ。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

谷 學 氏

グリーンブルー社長

CSR評価制度創設を ユーザーが喜ぶ機関に

「分析機関においては、ユーザー側に立つ視点が欠けていると考えているからだ。ユーザーにとってメリットがあるサービスを提供し、その結果、利益を出せるようになることが、その意味で、トリプルボトムラインの観点から企業全体をバランス良く評価すれば状況も改善できると考えている。

現状では、経済的な側面は、財務情報を見れば分かる。ただ、社会的側面は見えて来ない。環境への取り組みはそれぞれ異なる。その見えない領域を見えるようにすることが可能になる。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。

「分析機関のCSRを客観的に評価できる仕組みとは、どのようなメッセージか。